

『どの子も伸びる共有型しつけのススメ ～子育てに「もう遅い」はありません～』

内田 伸子

The recommendation for the sharing discipline style bringing out every children's potential – anytime we can start child rearing –

Nobuko UCHIDA

この講演では、第一に、想像力の発達について五官を使った体験が不可欠であること、第二に、学力格差は幼児期から始まるのか、第三に、子どもを伸ばすしつけや言葉かけはどのようなものかについて考察し、子どもの創造的想像力を育むための親は子どもにどうかかわったらよいか提案したいと思います。

1. 想像力の発達

1) 想像力は「生きる力」である

想像力は生きる力であると私が認識するきっかけは、ユダヤ人医師ヴィクトール・フランクルの『夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録—』（みすず書房、1961年）の著作を通してでした。フランクルは第二次大戦のときにドイツ・ナチスに捕えられ、強制収容所で強制労働に従事していました。あるとき、囚人たちの耳に12月24日に自分たちは解放されるというニュースが伝わってきました。12月24日の朝、今か今かと待ちわびる人々の耳に届いた知らせは「解放されるというのはデマであった」という残酷な知らせでした。その途端、収容所のあちこちで悲鳴があがりました。身体に何の故障もない元気な若者たちが、ショックのあまり心停止状態に陥り、ばたばたと倒れて息絶えてしまったのです。一体どうしてこんなことが起こったのでしょうか。フランクルは次のように述べています。

「人間が強制収容所において、外的のみならず、その内的生活において陥っていくあらゆる原始性にもかかわらず、たとえ稀ではあれ、著しい内面化への傾向があったということが述べられねばならない。元来、精神的に高い生活をしてきた感じやすい人間は、ある場合にはその比較的繊細な感情素質にもかかわらず、収容所の生活のかくも困難な外的状況を苦痛ではあるにせよ、彼らの精神生活にとって、それほど破壊的には体験しなかった。なぜならば、彼らにとっては恐ろしい周囲の世界から精神の自由と内的な豊かさへと逃れる道が開けていたからである。かくして、そしてかくしてのみ、繊細な性質の人間がしばしば頑丈な身体の人々よりも、収容

所の生活をよりよく耐え得たというパラドックスが理解され得るのである。」（フランクル、1961；121-122頁）

人はパンのみにて生きるにあらず、精神力である想像力を働かせることによって生きる力が与えられるのだ、ということフランクルはこの書で訴えております。

2) イメージの誕生—「第一次認知革命」—

では想像力はいつごろから働き始めるのでしょうか。生後10か月ごろにイメージが誕生します。この時期には、脳の記憶をつかさどる部位—大脳辺縁系の海馬の神経活動が始まり、体験を記憶貯蔵庫に蓄積します。目の前に似たような出来事があると、それに関連した記憶を思い出し、頭の中にイメージの形で描き出すようになります。たとえば、積み木を自動車に見立てて遊ぶ、「見立て遊び」やドレッサーのヘアブラシを見たときに、母親がブラシで髪をとかす姿を思い出してまねる「延滞模倣」もみられるようになります。記憶を蓄えるようになると、モノは見えなくなってもあり続けるという、モノの同一性の認識が始まります。この時期の赤ちゃんは「いないばあ」遊びが好きですが、これは、お母さんが消えてもまた出てくるという予測をもつことができるからです。

生後10か月ごろになると赤ちゃんは母親が見ているモノを見る、いわゆる「共同注意 (joint attention)」をするようになります。また環境内の変化に敏感に反応して、びっくりした表情で「あれなに？」と母親に問いあわせるかのように母親の顔を見上げる「社会的参照 (social referencing)」などの行動がみられるようになります。これらの行動は赤ちゃんの内面にイメージが誕生したことを意味しています。イメージ (表象) が誕生したことで、

何かを別のもので代用して頭のなかにそのモノのイメージが描けるようになったことを意味しています。首がすわったとか、ねがえりができるようになったというように外からはっきりとわかる変化ではありませんが、頭の中にイメージをもつようになったということは、認知発達上の革命的なできごとですから、私はこの時期の変化を「第一次認知革命」と呼んでいます。

お母さんとの愛着関係が形成されるようになると、赤ちゃんはお母さんのそばにいたがるようになります。愛着を形成した人といると、赤ちゃんはご機嫌よく遊んでいます。遊んでいる間もお母さんの姿を確認したり声を聞こうとする様子が見られます。赤ちゃんは大人の反応に敏感で、環境内の変化に気付くと、緊張して「あれなに？」というようにいぶかしげな表情で他者に問い合わせる行動、いわゆる「社会的参照」をします。

カリフォルニア大学バークレー校のキャンパス(Campos, J.J.) たちは、「視覚的断崖装置」を使って社会的参照の出現を調べています。断崖があるように見える装置の端に乳児を座らせ、対面に立っているお母さんにさまざまな表情をしてもらい、乳児がアクリル板を渡るかどうかを観察しました。お母さんがおびえた顔をした場合、赤ちゃん全員が断崖を渡らず、お母さんがニコニコすると、19人中15人が渡りました。赤ちゃんは、お母さんの表情にとっても敏感で、お母さんの表情を手がかりにして自分の行動を調節していることがわかりました。

幼児教育学科の向井美穂先生は社会的参照の出現条件について調べてみました。まず18か月の乳児と母親にプレイルームで遊んでもらい、慣れたところで乳児が見たこともない「犬型のロボット」のアイボを提示しました。すると30名の乳児のうち12名は社会的参照を行いました。残りの18名は母親の表情を確認することはなく、目は犬型ロボットに釘付けになっていました。中には犬型ロボットがなぜ動くのかを知ろうとするかのように興味深そうに近づいて観察する子どももいました。その後、同様の手続きで別の子どもたちを対象に12ヵ月と18ヵ月の時点で縦断的実験を行ないました。12ヵ月の時に母親への社会的参照行動をあまり示さなかった子どもは18ヵ月でも同様の姿を見せることが多かったのです。キャンパスらの実験では対面の位置に母親がいるため殆どの子どもが母親の顔を見ることとなりますが、向井先生の実験では子どもは母親の斜めの位置に座っているため、母親の方を見ない子どもも出てくるのです。

この実験に協力してくれた子どもたちは平均で1週間に40語も新しい語彙を、自分の語彙のレパートリーに付け加えるというような、急激な語彙爆発が起こっていました。どんな語彙を発話するかを調べてみると、社会的参照をした子どもの語彙の65%は“おいち(し)いね”、“きれいね”、のような挨拶や感情表現のことは、残りが名詞でした。これは人間関係に敏感なタイプではないかということで、私たちは「物語型」と名前を付けまし

た。そして、母親に問い合わせず、アイボを見つめていた子どもの発話語彙の95%は名詞で、残りの5%は「落っこった」、「行っちゃった」、「ピーポピーポっていった」というような動詞でした。これらの子どもは、モノの動きや変化、因果的な成り立ちに敏感なタイプということで私たちは「図鑑型」と命名しました(内田・向井, 2008)。図鑑型の一番はじっこにいるのがアスペルガーや自閉症のお子さん、物語型の一番はじっこにいるのが、ダウン症のお子さんです。定型的な発達をするお子さん方はこのどこかに位置しているのです。

これらの一連の研究は、子どもの感情が外界の知覚や行動の「社会的調整役」を果たしていることを示唆しています。また他人の感情の理解はかなり早期から開始され、他者の感情を自分の行動の調整の手がかりにしているという点は非常に興味深いと思います。親の側でも子どもの特徴、個性や気質に敏感で、子どもへのはたらきかけ方を自然と調節している点も興味がひかれます。

この物語型、図鑑型を分ける原因は、父親か母親の遺伝情報から受け継いだもので、個性の核になる気質の違いです。同じご夫婦からでも、どちらの遺伝情報をより多く受け継ぐかによって「物語型」「図鑑型」の両方の子どもが生まれる可能性があるのです。こんなふうには、乳幼児初期から、何に敏感か、何に関心を持つのかに分かれるのです。また、図鑑型は男の子が多く、物語型は女の子が多いというような性差もあります。

男のおさんは女のおさんに比べて環境ストレスに傷つきやすく、遺伝病にかかりやすく、ストレスに耐えられないのです。男の子は、環境変化に敏感で、夜泣きも多いし、病気に罹ると女児よりも重いのです。それに対して、女の子のほうが身体が大きくて口が達者で、人の顔色見るのも上手です。女児は3歳になれば、もう一人前の「レディー」と言ってもよいくらいに社会性も発達します。このように第二次性徴までは女の子が男の子に比べて順調に成長していきます。しかし、第二次性徴の起こる思春期に、男児も追いついてきます。男児の身長は急に高くなり、女の子を追い越してしまいます。声も低くなり、筋力もついて頼もしくなります。このように、男女の成長発達の時期の違いや環境への適応の仕方の違い、得意分野の違いなど、性差や個人差を大事にして子育てしていただきたいと思います。

3) 体験が豊かであるほど想像世界は豊かである

生後10ヵ月ごろに、イメージが誕生し、想像力が働き始めます。見えない未来を思い描くためには材料が必要です。五官を使った直接体験や、絵本や図鑑で知った擬似的な体験も含めて「経験」が多いほど豊かな想像世界を描き出すようになります。しかし想像は経験とまったく同一のものではありません。思いだされる経験は、断片的なものですから、それをつなぎ合わせたり、あるいは脈絡をつけたりするときに、必ず加工作用が起こりま

す。想像すれば必ず何か新しいものが付け加わります。新しいものが生まれる創造の可能性が出てくるのです。「想像は創造の泉」なのです。

2歳5か月の女兒と3歳7か月の女兒の語りを比べてみましょう。3枚の絵カードを子どもの前に置いて、お話をつくってもらいました。

2歳5か月の女の子は『①うさタン、ピョンピョン、②イテュー、ころんだよ、石、ころんだ、③エーン、エーン、うさタン、えーん』。自分も泣きまねをしながら、語ってくれました。

3歳8か月の女兒は、『①うさこちゃんが、お月さんを見ながら、楽しくダンスしていました。②上ばかり見ておどっていたので、石ころにつまづいて、水たまりに、しりもちをついてしまいました。③頭から、水ぬれになった、うさこちゃんは泣いてしまいました』と語りました。想像力を働かせ、絵には描かれていない要素を補い、イメージを描きだし、そのイメージを解釈して語ってくれたのです。

4) 暗記能力は「収束的思考」・想像力は「拡散的思考」

今ここで暗記能力と想像力の違いを整理しておきましょう。思考活動は、収束的思考と拡散的思考の2つのタイプに分かれます。収束的思考は暗記能力、拡散的思考は想像力です。どちらの思考も知識や経験が材料になります。収束的思考は既有知識や経験を加工せずに取り出す、日常語で「暗記能力」のことです。試験問題を見て目の前にして覚えたことをそのまま使って答え、知識を再現することが求められるのが暗記能力です。しかし、知識や経験を思い出して、類推を働かせたり、因果推論を働かせることにより、映像的なイメージや言語的なイメージを作り出す力が拡散的思考、つまり想像力なのです。

私たちが生きていくうえで必要なのは、むしろ想像力のほうです。私たちが人生のいろんな時期に出会う課題というのは、答えが決まっている課題というのはほとんどありません。課題に直面すると、そのときどき、よりよい答えを見つけようとしていろいろ考え、想像をめぐらせて答を出そうといたします。経験や知識がたくさんあればあるほど、よりよい解決ができるはずですよ。

日本の学校文化では、暗記能力が大事にされてきました。日本の子どもたちは、目の前のグラフを読み取ったり、日本は将来どんな事態になるだろうかを想像して問題を解決したりするようなタイプの試験問題を経験しておりません。学校では知識の定着を測定するタイプの試験、いわゆるアチーブメントテストが圧倒的に多いのです。入学試験がその典型です。しかしOECD（経済開発機構）が義務教育終了時に、各国6千名に対して実施したPISA調査では、日本の高校生は惨憺たる成績で、アジアで最下位でした。

PISA調査は拡散的思考力、いわゆる想像力を測定し

ているわけですが、これが日本の高校生にとっては馴染みがなく、残念なことに文章題には白紙答案が多かったのです。

5) 類推—知識獲得の手段

私たちは類推を働かせて、自分がよく知っていることに関係づけて新しい情報を取り込んでいます。たとえば、海岸でウニを見つけた2歳児は「ボール」と呼んでウニを指差しました。それを聞いた母親は、「ボールみたいね、ウニって言うの」と説明します。次にウニを見つけたその子は、「あ、ウニ、ウニあった」と知らせます。このやり取りがウニという名前を覚えるきっかけになっているわけです。こうやって、新しい情報は、自分の知識や体験に関係づけることによって取り込み知識を増やしていくのです。

子どもたちの発話には類推が働いている例がたくさんあります。

3歳の男の子が夕焼け空を見ながら帰ってきました。窓を開けたら満月が見えた瞬間に男の子は、『ゆうやけこあけのかたまりだ!』と夕焼け空と目の前の月を結びつけたのです。4歳の女の子は空を見上げて、「雲ってふしぎだな、だれがつくっているのかな」と思っていました。その女の子が大きな工場の煙突からもくもくと立ち上る煙を見た瞬間、『ここで雲をつくってたのか!』と叫びました。5歳の男の子は『おかあさんはおばあちゃんから生まれたんでしょ。じゃあ、お父さんはおじいちゃんから生まれたの?』と母親に質問しました。よく知っていることと知らないことを関係づけて未知の事ごらを知ろうとしていることがわかる発話です。お通夜の席で、白黒の幕をみた6歳の女の子は『パンダはおめでたくない動物なんだね、きっと』と母親の耳にささやいたので。 (全労済編『最近子供がふともらしたいとおしい“ひと言”は?』河出書房新社、1998)

このように、子どもたちの発話から、子どもたちは類推を働かせ知識を獲得したり問題を解決していることが推測できます。

6) 語りの力の発達—談話文法の獲得—

それから幼児期を通して語る力が育っていきます。3歳までに文法が獲得され、5歳後半ごろには「談話文法」(起承転結のような文章の展開構造の構成ルール)が獲得されます。語彙も豊かになってきますと、子どもは長いお話を語るようになります。

5歳10か月の女の子が絵本作りごっこをしていたときに創った「星を空に返す方法」というお話を思い出して私に語ってくれました。その語りを紹介しましょう。

「星を空に返す方法」(M.T. 5歳10ヵ月)

「7月15日はうさぎさんの誕生日です。今日は7月15日、うさぎさんの誕生日だから森の動物たちが集まって

きました。

そして、みんなで食事をしているときにケーキの陰から星が出てきました。星はみんなに言いました。『僕ね、空から落っこっちゃったの。だからね、僕をね、空に帰して。』と言ったら、みんなはびっくりしました。『空に帰すって?』『そうさ、僕は空の星さ。』『星?』と、みんなはびっくりしました。そこで、象は言いました。『おれにまかせてよ。』と、象はその星を自分の鼻に入ると、勢いよく飛ばしました。それでも星は、落っこってしまいました。そしたら、今度はみんなで相談をして、うさぎが言いました。『そうだよ。ながーい笹を持ってこようよ。それに星を乗せてあげてさ。そしてさ、また、その笹をさ、伸ばしてさ、空までさ、送ってあげるのさ。』と、うさぎが言うと、みんなは『そうしよう。』と言って、笹を取ってきました。

そのなかでも一番笹が長いのを取ってきたのはネズミでした。ネズミは、手がゆらゆらになって、すごく長い笹を持ってきました。みんなでそのさきに星を乗せると、土のなかに埋めて1日待ちました。そうすると、その笹は、1日だというのに、ぐんぐん伸びて空に届きました。そして、星は空に帰ることができました。

そして、その誕生日が終わったあと、みんながうちで空を見ると、キラキラ光ってる、とてもきれいな星がありました。みんなはその光ってる星を、きっと落ちてきた星だと思ったのです。おしまい。』

(内田, 1999; 170頁)

このように、誕生会での出来事、星がケーキのかげから出てくるという事件が起こり、事件の解決に向かって登場人物たちが努力する様子が語られ、みそっかすのネズミくんがお手柄を立てるという構造のお話を語ってくれたのです。

この子だけが地区別というわけではなくて、五歳後半過ぎの子どもたちが語る物語には、こういうすてきなお話がたくさんあります。この語りの中に「1日だというのに笹は天まで伸びて」という表現に注目してみましょう。「のに」、という逆接の接続助詞は、この世にはそういうことはない、「虚構」、つまり「うそっこ」の出来事を演出するために使ったのです。

虚構と現実っていうのを関係づけるためには、カットバックという手法が使われます。ファンタジーでは「夢のなかのできごと」という演出技法が使われます。虚構「夢の中の出来事」と現実が往復できないとファンタジーは楽しめません。たとえば宮澤賢治さんの『銀河鉄道の夜』ですが、ジョバンニが親友のカンパネルラと銀河鉄道に乗って不思議な旅を体験します。この体験は夢の中の出来事であり、それを示すのがこの部分。「ジョバンニは目を開きました。元の草の中に疲れて眠っていたのでした。胸はなんだかおかしく火照り、頬には冷たい涙が流れていました。目を開きました。眠っていた

のでした」とここで、聞いていた子どもは時間を一旦ストップします。「え。眠っていたの。夢を見ていたのか。いつから眠っちゃったんだろう」巻き戻します。「ああ、そうだ。病気のお母さんのために牛乳を買いに来ただけ」牛乳屋のおじさんがいなかったから、傍の草むらにこう仰向けに寝転んでおじさんの帰りを待っていました。やがて、満天の星空から汽車がやってきた。そこでジョバンニは汽車に乗り込みます。そうしたら、親友のカンパネルラも乗っていました。「ああ、うれしい」ということで、銀河ステーションやプリシオン海岸等、美しい所を旅してまわります。やがて南十字星が見えたところで、貨車の中のお客さんが旅支度を始めました。心配になったジョバンニはカンパネルラに何度も「一緒に行くよ」と確認します。最初は頷いていたカンパネルラがうなずかなくなり、南十字星の下で降りて行ってしまう。この作品が作られたのは、昭和15年ですから、あの豪華客船のタイタニック号が氷山に衝突して沈んでしまった事件が起こった年です。この汽車は南十字星のもとで天国に旅立つ人たちを送り届ける汽車であったという設定をとっております。

この作品には、カットバックが実に巧みに使われています。カンパネルラが汽車から降りて行った時間は、物語の現実時間では、いじめっ子のザネリが川に溺れそうになるのを助け出そうとして、カンパネルラも自分から飛び込む、そしてザネリは助け出せたけれども、カンパネルラ自身は亡くなってしまう、その時間に一致させているのです。

7) 日本語談話の構造はカットバックが苦手

日本語談話の構造の特徴は、時系列因果(And-then reasoning)です。スタンフォード大学の附属幼稚園や附属小学校の子どもたちに協力してもらって英語を習得する過程を調べていました。いろいろなテストで英語の習得度を調べてみました。「字のない絵本」にお話をつくって語ってもらうという課題を課したことがあります。絵本を理解させた後、母語と英語の両方でお話をつくってもらい、語ってもらいました。

2匹の蛙が逃げ出すところで、日本語母語話者や韓国語母語話者の子どもは幼児も小学生も、「男の子と犬がベッドで眠っていた。そして蛙がこっそり逃げ出した」というように時系列因果でつなげていきます。それに対して英語母語話者、それから、インド・ヨーロッパ語族、フランス語やドイツ語母語話者の子どもは、「蛙がこっそり逃げ出した。どうしてか」というと、男の子と犬が眠りこけていて音に気づかなかったから」「why-so because reasoning」「○○だった。なぜなら、どうしてか」というと、○○だったから」という結論先行の因果律で語ることが多かったのです。日本語母語話者は時系列因果、英語母語話者は幼児も児童も結論先行の因果律を使って、論拠を説明するような語り方になります。

しかも欧米ではキンダーガルテン（幼稚園年長組に該当する）から Show and Tell（サークルタイム）の時間に、言語技術（Language Arts）を学びます。パラグラフの構成の仕方や、論拠をあげて説明する表現方法を学ぶのです。日本ではこうした教育をすることはありません。放っておけば時系列談話になりますので、小学生の頃から、事実と意見の書き分けや結論先行型作文教育が必要ではないかと考えています。

8) 可逆的な操作は何歳から可能か？

因果律表現を構成する精神操作は「可逆的操作」です。これは因果推論の手段になります。因果律を構成する精神操作のことを、可逆的な操作と呼ぶのですが、何歳ごろから使えるかについてはいろいろな理論がありました。

まず、発達心理学者のピアジェは7、8歳くらい、小学校の中学年くらいからと言っています。哲学者であるイマヌエル・カントは、これは生まれつき、先天的なもので、私たちは出来事を見ると、前の出来事が後の出来事の原因だと思う。原因と結果の関係でとらえる因果スキーマ（因果関係に関する過去の経験や知識体系）の関係をもっていると言っています。発達心理学者のスペルケは生後4ヵ月くらいになると、前から後ろへという順番にいき、因果関係でとらえられるらしいという実験をしています。

私は談話の文法がいつ成立するかという研究をやっておりまして、それが成立するのは5歳後半、時間概念が成立するのが5歳後半だというデータをもっていたので、別の仮説をたてました。可逆的な操作が使えるようになるのは5歳後半ではないかという仮説です。二つの場面をつなげるときに、後ろから前へ言語化できるのは、5歳後半過ぎではないかという仮説をたてて、次のような実験をやってみました。

虚構と現実というのをうまく操作できるようになるのは何歳ごろか、夢のなかのできごとが自分の語りのなかでも語れるのは何歳からかを二つの出来事をつなげるといって課題を使って調べることにしました。

まず、「マサオちゃんが大きな石につまづいて転んでしまった。そして、血が出て泣いています」「そして」とつなげる。それとこれと比較するために、因果律の語りも取りました。「マサオちゃんは怪我して泣いています。だってさっき大きな石につまづいてしまったからです」後から理由をつけるような語り。この逆向条件から、どうしても時系列になってしまいます。

4歳児は「本当は芽からアサガオになるんだけどな」「でもこっちからお話しして」もうひと押ししますと、「アサガオが小さくなって芽になった」と時系列に変えて語ります。5歳児も「アサガオが咲きました。アサガオが咲いて種ができたので、種をまいたらまた芽ができました」というように時系列に語るのです。幼児期には可逆

的操作は使えないのだろうかとかきりめかけたとき、あることを思い出しました。2歳代の終わりごろから、こどもは「だって、さっき〇〇したから」「だって△△だもん」という表現を使うようになります。反抗する場面や母親に告げ口するときの口調を、この実験場面で思い出してもらうことにしました。例題の絵カードを使いながら、「お人形さんの足がとれちゃった。だって、さっきミヨちゃんとマリちゃんが、両方から引っぱり合いっこしちゃったから」「『だって、さっき〇〇したから』とつなぎの言葉を入れると、こちらが先でこちらが後という順番を変えず、こっちからつなげられるよ、真似してみて」3回真似してもらいました。その結果、5歳後半過ぎ、6歳前半の子ども全員が因果律の語りができました。たった3回模倣するだけで結論先行因果律で語ることができるということは、可逆的な操作はもう獲得されているものと思われまます。

幼児期の終わりには、夢の中の出来事を語り、ファンタジーの面白さがわかるようになるのです。また、〔結果〕「まさおちゃんは泣いています。」を語り⇔〔原因〕「どうしてかというと、まさおちゃんは、さっき大きな石につまづいて転んじゃったからです」と後から理由づけることができるようになるのです。ですからお子さんが5歳後半すぎになったら、親や保育者は、答えや解説を与えてしまわずに、「どうしてだろうね？」と子どもに質問を返し、いっしょに考えてみてください。子ども自身に理由や論拠を考えさせるような語りかけをしていただきたいと思います。

2. 学力格差は幼児期から始まるか

1) 日本の学力低下について

義務教育の終わりに経済協力開発機構（OECD）が実施した国際学力調査の結果をみると日本の高校生は、論理力や記述力を必要とする課題に白紙答案が多く、先進諸国では最下位の成績でした。文部科学省が全国の小学校6年生、中学3年生全員（2010年からは約7割が参加）に実施している学力・学習到達度調査においても、PISA調査と同様に、論理力・記述力を測定するB問題（活用力）が低いという結果が明らかになりました。

暗記で答えられる基礎・基本的な学習内容はおおむね理解しているのに、PISA調査同様に、活用力、つまり、知識・技能を活用して、思考し表現する力に課題があるという結果が明らかになりました。そこで文科省は主要教科の時間数を増やし、図工や音楽などの表現科目や技術家庭科などのものづくりの時間を削減することによって教育課程を改訂したのです。改訂後の2010年の結果をみると、論理力・記述力は改善しなかったのです。

しかも、2010年には、文部科学省幼稚園課が、幼稚園卒は保育所卒よりも成績が高いという結果を発表しました。幼児教育の大切さを検証した初めての調査だという

のです。幼児期から学力格差が始まっているのでしょうか。発達心理学研究室の5年にわたる、日韓中越蒙国際比較調査の結果から検証してみたいと思います。

2) 学力格差はいつから始まるか—幼児の読み書き能力の調査結果から—

教育社会学者やマスコミは、「学力格差は経済格差を反映している」と述べています。東大生の親が一番金持ちというような結果を公表しています。経済格差は子どもの発達や親子のコミュニケーションに一体どんな影響を及ぼすかに興味をもち、幼児のリテラシー（読み書き能力）の習得に及ぼす社会・文化的要因を明らかにする調査をしてみることにしました。日本・韓国・中国・ベトナム・モンゴル、各国3千名の3、4、5歳児とその保護者全員、それからこの子たちを担当している保育所や幼稚園の先生方全員に短期縦断調査（リテラシー調査）を実施しました。

「リテラシー」というのは、識字とか読み書き能力と訳されることが多いのですが、もともとはラテン語、ギリシャ語を読み解く力といった広い教養を意味しておりました。学校制度が導入されてから、識字とか読み書き能力と、限定的に使うようになったのです。私たちは、読み書き能力だけではなく、文字を書くための指先の運動調整能力や文字読みに使われる音節分解能力、さらに、知能テストの代わりに、「絵画語彙検査（PPVT）」を使って語彙能力も測定しました。

リテラシー調査の結果をご紹介します。71文字の読みの力、また鉛筆で文字を書く準備がどれほどできているかの模写力は5歳後半になると家庭の経済の影響を受けなくなります。ところが、絵画語彙検査で測定した語彙力は加齢に伴い家庭の経済の影響が出てきます（図1）。

家計の豊かな家庭では、習い事をさせているのかもしれませんが。そこで早期教育の影響を調べてみました。語彙得点に関しては、習い事をしてない子どもよりも、習い事をしている子どものほうが成績が高いのです。しかし、芸術系、運動系、ピアノやスイミング、体操教室に行っている子どもと、受験塾や英語塾に行っている子どもの間に語彙得点の差はなかったのです（図2）。

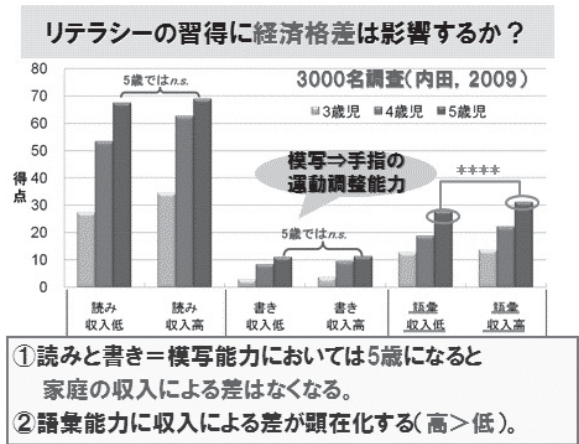


図1 リテラシーの習得に家庭の所得は影響するか（内田・浜野，2012）

習い事の種類と読み・書き・語彙との関連

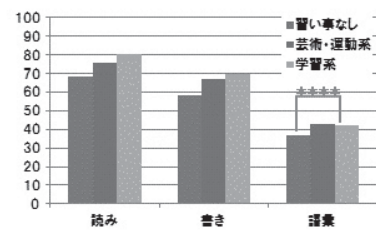


図2 習い事の種類とリテラシーや語彙得点の関連（内田・浜野，2012）

3) 体操教室に通っている子どもの方が運動能力が低く運動嫌が多い

杉原隆東京学芸大学名誉教授らのグループが実施した全国3・4・5歳児全国9千名の運動能力調査の結果も同様でした。体操教室やバレエ、ダンス教室に通っている子や、体操の時間を設けている幼稚園や、保育所に通園している子どもの運動能力が有意に低く、運動嫌いの子どもの多かったです。

体操教室やバレエ教室で運動能力が低いのは、①特定の部位を動かす同じ運動を繰り返している、②説明を聞く時間が多く肝心のからだを動かす時間が少ない、③競争意識が芽生える5歳後半ごろになると、他人よりうまくできないと教室には行きたがらなくなる、などの原因が考えられるということでした。

では、運動嫌いにしないための解決策はどうかというと、杉原先生は子どもが好きな遊びができるようにすること、好きな遊びのなかで、登ったり、渡ったり、運ぶ、ぶら下がる、走るのを要請するような環境を設定することが大事だと指摘しておられます。リテラシー調査でも同じ結果が明らかになりました。

4) 子ども中心の保育（自由保育）で子どもが伸びる

私たちの調査結果でも、自由保育の子どものほう一斉保育の子どもより語彙力が高いという結果が出ました。「アプローチ・カリキュラム」と称して、小学校1年生の国語や算数、体育などを、先取り教育をしている幼稚園や保育所の子どもに比べて自由遊びの時間が多い幼稚園や保育所の子どもの語彙力が豊かであるとう結果が明らかになりました（図3）。

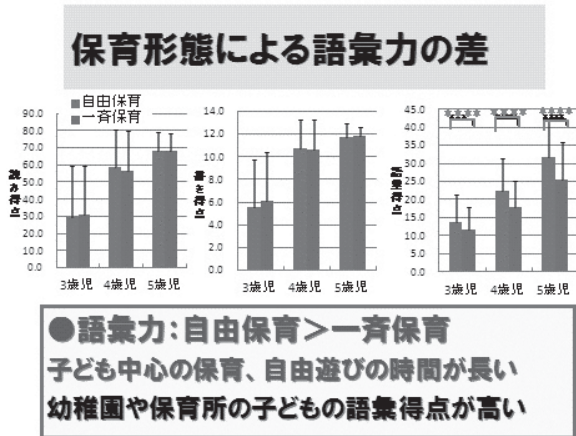


図3. 園種より保育形態が語彙力と関連する (内田・浜野, 2012)

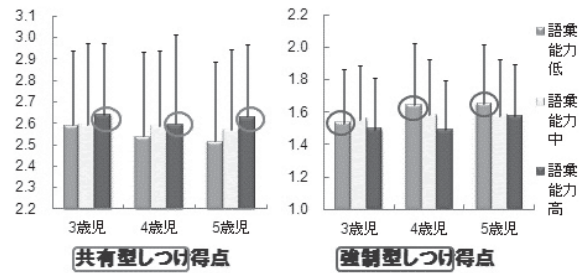
5) 親のしつけ方は子どもの発達に影響する

さらに、語彙得点が高い子どもは「共有型しつけ」を受けており、語彙得点が高い子どもは「強制的しつけ」を受けていることが明らかになりました。

共有型しつけとは、親子のふれあいを大切に、子どもと楽しい経験を共有したいというしつけ方を指しています。高所得層に多いのですが、分析を進めてみると、低所得層であっても、家庭の蔵書数が多いと子どものリテラシーや語彙得点が高くなります。逆に、子どもをしつけるのは親の役目、悪いことをしたら罰を与えるのは当然だ、力のしつけも多用してる、言うこときかなく、ひっぱたきます」と答えているご家庭では、所得の高低にかかわらず、リテラシー得点や語彙得点ともに低いのです（図4）。

しつけスタイルと語彙能力

共有型しつけ vs. 強制的しつけ



語彙得点が高い子どもは、共有型しつけを受けており、語彙得点が高い子どもは、強制的しつけを受けている。

図4. しつけスタイルと語彙力は関連する (内田・浜野, 2012)

この子どもたちが小学校に行って1年間学習をした後、3学期に、PISA 型読解力の1年生版テストを受けてもらいました。その結果、幼児期に語彙が豊かだった子どもは、このPISA 調査の得点が高かったのです。指先の運動調整能力が発達していた器用な子どもも学力テストの成績が高くなったのです。つまり、同じ子どもたちを追跡していますので、相関関係ではなく因果関係であります。幼児期の語彙能力と書き準備能力は、小学校の国語学力に因果的に、因果関係を持って影響を与えているという結論が得られたのです。

さらに、幼児期に共有型しつけを受けていた子ども、自由保育を受けていた子どもは小学校になってから国語の成績が高いということも出てきました。逆に、幼児期に強制的しつけを受けていた子ども、一斉保育で1年生の学習を先取りした教育を受けていた子どもは、国語の成績が低下するのです。つまり、子どもの主体性を大事にする大人の関わりが子どもを伸ばすということの証拠が得られたのです。

3. 子どもを伸ばすことばかり

1) 親子のやりとりの観察から

共有型しつけと強制的しつけで親子のコミュニケーションにどんな違いがあるかを検討することにしました。高所得層、高学歴、専業主婦、そしてしつけのスタイルにおいて共有型と強制的型が30組ずつ合計60組のご家庭を訪問して、パズルを解く場面や絵本の読み聞かせ場面での親子のやり取りを観察させていただきました。

結果をまとめると、共有型しつけの母親たちは、子ども自身に考える余地を与えるような共感的で援助的なサポートをしていました。子どもに敏感で子どもに合わせて柔軟に調整しています。それに対応するように、子どもは主体的に探索し、自立的・自律的に考えて行動することが多かったのです。

強制的しつけの下では、母親は、子どもに考える余地を与えない、指示的・トップダウン的な介入がしばしば

与えています。過度に介入します。情緒的なサポートがとて低く、勝ち負けの言葉が多いのです。これに呼応して、子どもは主体的に探索できなくなっている。子どもはおどおどと、親の指示を待ち、顔色を見ながら行動している様子が窺われます。

強制型しつけのもとではどうして子どもは伸びないのでしょうか。社会心理学では楽しい気分ときには記憶力が高まり、不快なときには記憶力が低下するという結果が出されています。脳科学でも強制型しつけのもとで記憶力が低下してしまう証拠が見出されています。大脳辺縁系のストレスを感じる「扁桃体」で緊張や不快を感じると、記憶を司る「海馬」で失敗例がよみがえり、ほかのことを考えられなくなり、頭が真っ白になってしまうのです。扁桃体がおもしろいな、楽しいなって快感を感じていると、情報処理の指令を出す「ワーキングメモリー」に情報伝達物質がどんどん送られて、海馬を活性化します。目の前の情報を記憶貯蔵庫にどんどん蓄えることができるのです。叱られながらやった勉強は身に付きませんが楽しく活動しているときには「好きこそもの上手」という状態になり、子どもの学力も伸びるのです。

2) 幼児期のしつけ方は小学校の学力まで左右する

この子どもたちが小学校に入り、1年間小学校で学習をした後、3学期にPISA型読解力の1年生版テストを受けてもらいました。幼児期に語彙が豊かだった子どもはPISA型読解力の成績は高いのです。それから、指先が器用な子ども、幼稚園や保育所で造形、つまり、段ボールや紙を使って工作したり、絵を描いたり砂団子を作ったりなど指先をよく動かしていた子どもは、1年生になってからのPISA型読解力の成績が高くなりました。また、幼児期に共有型しつけを受けていた子ども、自由保育で育った子どもの学力も高くなりました。韓国も全く同じ結果でした。

しつけスタイルやどういう保育をしている幼稚園か保育園かを選ぶことができますから、とても希望のもてる結果でした。幼児期の遊びは大人のような仕事に対立するものではなく、主体的に活動することを意味しています。主体的に面白がって遊ぶとき、頭は活発に働いてくれます。遊びを通して子どもはいろいろ吸収しているのですね。

そうすると、文部科学省の幼稚園課が発表した「幼稚園卒の子どもたちの成績が一番高く、保育所がそれに次ぎ、未就園の子どもが低い」というマスコミ発表には疑問が出てきます。2010年には幼稚園と保育所の役割をあわせもつ「子ども園」をつくることをめぐって、文部科学省と厚生労働省で綱引きをしている時期でした。そう考えてみると、文部科学省の発表は誤った解釈である、あるいは曲解ではないかと思えます。私のところに取材に来られた4紙のうち、読売新聞（2010.7.28朝刊）が私のコ

メント、つまり「幼稚園、保育所の保育の質の違いは小学校6年生、中学校3年までも続くとは考えづらい、世帯の所得格差、しつけスタイル、家庭での親子のかかわり方の違いが、学力格差につながっているのではないか」というコメントを掲載してくれました。家庭の収入は平行移動しますし、しつけスタイルも親が変えない限り続くでしょうから、学力格差につながってくるのです。乳幼児期に、大人が子どもの主体性や内発性をいかに大事にしてかわるか否かが、将来の学力の差をもたらす原因になっていることが確認できたのです。

3) 共有型しつけのススメ

調査によって幼児期の親のしつけは小学校の学力テストに影響することが明らかにされました。まさか、大人になるまで影響は続かないだろうと考えていましたが、気になって仕方ありません。乳幼児期のしつけの影響力を成人で調べてみたいと思いました。

そこで、2013年に、23歳～28歳までの成人の息子や娘を育てたご家庭2000世帯を抽出して、親は子どもが乳幼児期～児童期に何に配慮して子育てしたか、ウェブ調査をしてみました。

すると、興味深い結果が明らかになりました。受験偏差値68以上の難関大学・学部を卒業して難関試験（司法試験や国家公務員試験、調査官試験、医師国家試験など）を突破した息子・娘をもつ親は、子どもと一緒に遊び、子どもの趣味や好きなことに集中して取り組ませたと答えました。また絵本の読み聞かせも十分に行っていたことも明らかになりました（図5）。

難関校突破組は子ども時代によく遊んだ

小学校就学前にとっても意識的に取り組んでいたこと

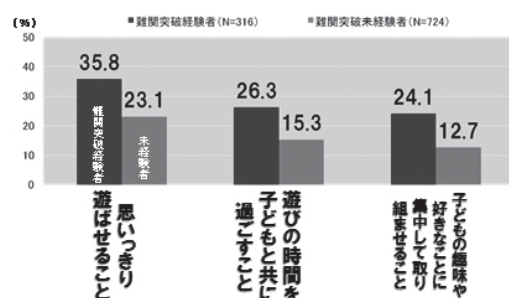


図5. 難関校突破組は子ども時代によく遊んだ (内田, 2014)

また、どんなふうに親は子どもに接していたかを尋ねると、子どもとの触れ合いを大切に、親子で楽しい経験を共有する「共有型しつけ」をした親が多かったです（図6）。

難関校突破組は共有型しつけを受けていた

子育てスタイルの傾向(共有型/強制型)

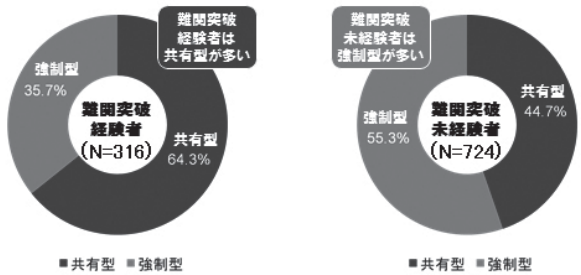


図6. 難関校突破組は共有型しつけを受けていた (内田, 2014)

では、どうして乳幼児期のしつけが、大人になるまで影響を与えるのでしょうか。親が子どもの自発性・内発性を大事にしている、子どもが熱中して遊ぶのを認め、「面白そうだね」と共感してくれる。大好きな親に誉められると嬉しいし、達成感も倍加します。小さな成功経験を重ねながら自信もわいてきます。難題をつきつけられても、「きっと自分は解決できる」という気持ちになり、挑戦力もわいてきます。こうして大人になるまで、自分で目標にしたことはなんとか自力で達成することを積み重ねた結果が、難関試験を突破する力が育っていったのでしょうか。

以上をまとめてみますと、幼児期の語彙能力と書き準備能力は、小学校の国語学力に影響すると、そして共有型しつけスタイルは語彙得点や国語学力の成績に因果的に影響していることがはっきりしました。

夫の学歴とか家庭の収入は、母親1人ではどうにもなりませんけれども、しつけスタイルは自分でコントロールすることができます。どのような保育を実践している園かも選ぶことができます。

ですから、学力格差や経済格差を反映しているというのは、見かけの相関です。経済格差が真の原因ではないのです。高所得層の家庭では、団欒の時間が多く、文化資源が豊かで、蔵書数も多いのです。親子で旅行に出かけたり、美術館や博物館にも出かけるなど子どもの体験を豊かにする機会も多くなっています。親は子どもの主体性を大事に、子どもを、人格をもった存在として敬意をはらい、子どもの主体性を尊重する「共有型しつけ」になることも多くなるのです。

親の子どもへの関わり方は意識して変えない限り子どもが大人になるまで続くでしょう。そのようなかわりを通して、子どもの考える力や創造的想像力が育たず、指示待ち族になってしまうものと思われます。

文科省のコメント：保育の質が小中学校の学力を規定するのではなく、世帯収入やしつけスタイル、家庭の雰囲気は小中学校までも持続し、学力・基盤力の語彙の豊

かさに影響を及ぼしているのではないかと思います。

おわりに一親への提言一

「50の文字を覚えるよりも、百の何だろ?を育てたい」

自分から本当にやろうとしないと自分の力にはなりません。自分で関心を持てばあっというまに習得してしまいます。文字は子どもの関心の網の目に引っ掛かってくるにすぎません。肝心なのは文字が書けるかどうかではなく、文字で表現したくなるような内面の育ちであるというふうに思われます。つまり創造的な想像力を育むことが、乳幼児期の発達課題になるであろうと。そこで、保育者や保護者、指導者の皆様に申し上げたいのは、次の5点です。

第一に、子どもに寄り添うと、安全基地になる。子どもとの間に信頼関係をしっかり作り上げることが大事です。

第二に、その子自身の進歩を認め、ほめていただきたい。ほかの子とは比べない5歳後半になれば、展示ルールが獲得され、人目を気にしたり人と比べりようになりますから。親はその子自身の進歩を認め、ほめていただきたいと思います。常に、「3つのH」—ほめる、励ます、(視野を) 広げる—ということばをかけていただきたいと思います。

第三に、生き字引のように余すところなく定義や回答を与えない。

第四に、裁判官のように判決を下さない。禁止や命令ではなく提案の形で言ってほしい。「何々したら」と提案したら、「僕したくない」と、子ども自身が選択する余地があります。このように、子ども自身が主体的に判断して選べるような選択の余地のある言葉をかけていただきたいと思います。

第五に、子ども自身が考え、判断する余地を残すこと。このような働きかけ、つまり大人が子どもの主体性を大事にした関わり方をすることによって、で子ども自身、自分で考えるという自律的思考力や、創造的想像力が育つのです。

親は、お子さんが疑問を感じた時、すぐに回答や解説をしないでいただきたいと思います。お子さんがどこに躓いているのか、どこに疑問を感じて先に進めないのかをよく洞察してください。お子さんが迷っている点が見つかれば、足場 (scaffolding; 注: 教育心理学者ブルーナー; J. Bruner, 1981) を架けて、お子さんが一歩踏み出せるようにしてあげてほしいのです。

子どもの質問にすぐに回答を与えず、上手に足場を架けたときには、4歳、5歳の幼児でも、まるで科学者がたどるような仮説検証の過程を自力で達成できたというエピソード—渡邊萬次郎さん (昭和38年当時秋田大学の学

長・理科教育の専門家）とお孫さんのやり取りをご紹介します。

「これにもお豆がなるの？」

私はかつて幼稚園の2児を近郊に伴った。彼らは「みやこぐさ」の花に注意を引かれたが、その名を問うほかに能がなかった。当時、私どもの菜園には、同じ豆科の「えんどう」の花が咲いていたので、私は名を教えるかわりに、その花を持って帰り、おうちでそれによく似た花を見出すようにと指導した。彼らが帰宅後、両者の類似を見出したときには、小さいながらも自力に基づき新発見の喜びに燃えた。やがて1人は「みやこぐさ」について、「これにもお豆がなるの？」とたずねた。それは誰にも教えられない、独創的な質問であった。

私はそれにも答えず、次の日曜に彼らに現場で確かめることを提案した。次の日曜に彼らがそこに小さな「お豆」を見出したとき、そこには自分の推理の当たった喜びがあった。秋がきた。庭には萩の花が咲いた。彼らは萩にも豆のなることを予測した。

彼らは過去の経験から、いかなる花に豆がなるかを自主的に知り、その推論を独創的にまだ見ぬ世界に及ぼしたのである。

『理科の教育』（明治図書）昭和38年11月号

祖父は子どもの質問にすぐに答えてしまわず、**3つのH「ほめる・はげます・（視野を）ひろげる」の言葉**をかけてあげたのです。足場だけ架けて、子どもがゆっくりと考える時間を与えたのです。

このエピソードのように、子どもが疑問をもち質問したときにはすぐに答えを与えるのではなく、子ども自身に考えさせるように足場を架けてあげてほしいと思います。どこから足場に登るか、足場に登って、どんな作業をするかを決める主人公は、子ども自身なのです。

引用文献

- 内田伸子『想像力の発達—創造的想像のメカニズム』サイエンス社、1990年。
- 内田伸子『発達心理学—ことばの獲得と教育』岩波書店、1999年。
- 内田伸子『子育てに「もう遅い」はありません』富山房インターナショナル、2014年。
- 内田伸子（編著）『よくわかる乳幼児心理学』ミネルヴァ書房、2008年。
- 内田伸子・浜野隆（編著）『世界の子育て格差—貧困は超えられるか』金子書房、2012年。